

IV 国語 2年次の成果と課題

1 成果

- (1) **根拠とする言葉を明確にし、着目した言葉の解釈を協働で創り上げる「対話」の指導**
根拠とする言葉に印を付けながら読むことや、根拠とする言葉を明確にして発言することで、互いの考えを共有しながら「対話」し、言葉に対する学びを深めることができるようになってきたことが成果である。
私たちは、文章を読むとき、例えば登場人物の行動の意味を前後の場面と結び付けるといったように、自分自身の中で複数の叙述を関係付けて考えている。しかし、発言の場面となると、筋道立てて話すことができず、聞き手からすると話が飛躍してよく分からないということが往々にしてある。聞き手が話し手の伝えようとしている内容を理解しないまま「対話」を重ねても、自分の考えを更新しないまま発言するに留まるため、個々の考えを共有して新たな解を創るまでに至らないことがこれまでの課題であった。
国語科における学びの過程で行う省察場面の一つに、協働の「対話」を行う場面が考えられる。個々の読みを伝え合う中で、他者から賛否や質疑といったフィードバックを得ることで思考が揺さぶられ、よりよい考えを再構築していく学びが期待できる。言葉の使い手としてまだまだ未熟な子どもたちにとって、何を根拠にどのように考えたかを明らかにして話す発言の仕方ができるようになったことは、自分の考えを正確に伝える一助となり、聞き手からのフィードバックが得られることにつながったと感じている。言葉の解釈の差異を捉えて仲間との「対話」を設定することで、「対話」の視点を焦点化し「対話」に不慣れた部分を補うことができる。「どの言葉に着目し、その言葉がどのような意味をもっているから、どんなことが言えるのか」という国語科の基本的な考え方を指導することが言葉に対する学びを深めるために不可欠であることが言える。

(2) **言葉の学びにつながる、教材と向き合う目を育む授業づくり**

これまでの学習経験が基盤となり、新しい教材の価値が見える。国語科の資質・能力の系統性を意識して教師が授業を構想することが、学びをつなげる子どもの姿を引き出すことを再確認できたことが成果である。

本単元のねらいに迫るために、全員に身に付けておきたい「見方・考え方」は何かを考え、活用する場面を意図的に設定し、授業を実践した。

2年「できごとや気持ちがつたわるように書こう～2年生は、楽しいよ～」では、様子を詳しく伝えるために何を説明するとよいのか、教師のモデル文を書き換える視点を考える場を設定した。「その説明があるときと、ないとき・・・」と考える方法は、以前説明文の学習で、書き方の工夫を見つけるために用いた「見方・考え方」だった。「○○がないとこんなことが伝わらない」という視点で文章と向き合った子どもたちは、自分の作文メモを見直すときも同じ考え方でメモを増やすことができていた。4年「想像をふくらませて読もう」では、他単元でも使っていた「普通だったらこんな書き方をしない」という「見方・考え方」を用いて、「普通だったらこんな行動はしない、こんな風には考えない」という視点で登場人物の言動を読んでいく学習を設定した。主人公の言動からその人らしさを読む経験を繰り返すことによって、「普通なら・・・」という「見方・考え方」を柔軟に用いて、これまで読み流していた叙述に立ち止まり、読み深める子どもの姿が見られた。

2 課題

互いの発言を正しく聞き合い、言葉や解釈の差異をもとに、言葉に関する問いを発し、その問いに答えながら追究していく子どもを育てる指導の在り方

話し手の技能を指導すると同時に、聞き手の力を高めることが、「対話」を通して国語科の学びを主体的に行うために必要だと感じる。

「よく分からない」「それは違うのではないかと」などと、子ども自身が学習中に立ち止まろうとする場面は、まだ少ない。子どもの発言がつながるようになってはきたものの、他の意見と比べて相違点を明らかにしたり、言葉の解釈の妥当性を吟味する発言をしたりするなど、子どもたち自身が互いの考えの深まりを触発し合う「対話」の力を育てていく必要を感じている。そのためにも、どんな子どもの発言から、何について話し合わせるかを教師が具体的にイメージし、授業の見通しをもつことが不可欠である。また、子どもが無自覚に用いた「見方・考え方」、思考を深めるきっかけとなった発言などを価値付けることで効果的な学び方として自覚させる必要がある。互いの考えを受け入れ、反応をフィードバックしていきながら行う「対話」の指導も、国語科の学びと同時に学習の中で行っていく。互いの意見を吟味する意義を実感させると同時に、吟味するきっかけを生み出した発言を価値付けることで、多様な考えを出し合いながら協働で学ぶよさを実感し、実践していく子どもの姿を引き出したい。

問いを発するためには、「本当にそうかな?」「他の考え方はないかな?」という自他の思考を吟味するクリティカルな感覚が必要となる。言葉の学習につながる吟味の場となるためには、着目した言葉の解釈を考えることで言葉の捉えが深まった場面を取り上げ、その学び方を価値付ける場が必要だと考える。感覚的に用いていた学び方を省察し、学び続けていこうとする子どもの姿を引き出す指導の在り方を探っていきたい。